例　言

1　本書は、独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所が2002年度におこなった調査研究の報告である。

2　本書は、Ⅰ 研究報告、Ⅱ 飛鳥・藤原宮跡等の調査概要、Ⅲ 平城宮跡等の調査概要、の３部構成である。Ⅱは飛鳥藤原宮跡発掘調査部、Ⅲは平城宮跡発掘調査部がおこなった発掘調査の報告であり、Ⅰにはそれを除く各種の調査研究報告を収録した。調査次数は、Ⅱが飛鳥藤原の次数、Ⅲが平城の次数を示す。2003年１月以降に開始した発掘調査については、本書では略報にとどめ、正式な報告は『紀要2004』に掲載する予定である。

3　執筆者名は、各節または各項の末尾に明記した。発掘調査の報告は、原則的に調査担当者が執筆にあたり、遺物については各整理室の協力を得た。

4　当研究所の過去の刊行物については、以下の例のように略称を用いている。

『奈良文化財研究所紀要2001』	→	『紀要2001』
『奈良国立文化財研究所年報2000－Ⅰ』	→	『年報2000－Ⅰ』
『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅳ』	→	『藤原報告Ⅳ』
『平城宮発掘調査報告Ⅸ』	→	『平城報告Ⅸ』
『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 26』	→	『藤原概報26』
『1995年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』	→	『1995平城概報』
『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報 14』	→	『藤原木簡概報14』
『平城宮発掘調査出土木簡概報 35』	→	『平城木簡概報35』

5　本書で用いた座標値は、改正前測量法の平面直角座標系（日本測地系）第VI系によるもので、2002年４月１日施行の改正測量法による新しい平面直角座標系（世界測地系）への座標変換はおこなっていない。当研究所では、2003年度の調査から原則的に日本測地系を廃止し、全面的に世界測地系を導入する。ただし、キトラ古墳では保存整備事業に関わり継続的な発掘調査をおこなう関係上、例外的に2002年度から世界測地系を採用しているため、本書の報告では世界測地系の数値を記した。なお、高さは東京湾平均海面を基準とする海抜高であらわす（日本水準原点：H=24.4140m）。

6　発掘遺構は、遺構の種別を示す以下の記号と、一連の番号の組合せにより表記する。
ＳＡ（塀・柵）、ＳＢ（建物）、ＳＣ（回廊）、ＳＤ（溝）、ＳＥ（井戸）、ＳＦ（道路）、ＳＧ（池）、ＳＨ（広場）、ＳＫ（土坑）、ＳＳ（足場）、ＳＹ（窯）、ＳＸ（その他）

7　藤原宮内の地区区分については、『藤原概報26』（1996・３頁）を参照されたい。

8　藤原京の京域は、岸俊男の12条×８坊説（１坊＝４町＝約265m四方）を越えて広がることが判明している。南北の京極は未確定であるが、東西京極の確認をうけて、本書では10条×10坊（１坊＝16町＝約530m四方）の京域を模式的に示した。ただし、混乱を避けるため、条坊呼称はこれまでどおり、便宜的に岸説とその延長呼称を用いている。

9　７世紀および藤原宮期の土器の時期区分は、飛鳥Ⅰ～Ⅴとあらわす。詳細については、『藤原報告Ⅱ』（1978・92～100頁）を参照されたい。

10　平城宮出土軒瓦・土器の編年は、以下のようにあらわす（かっこ内は西暦による略年式）。
軒瓦：第Ⅰ期（708～721）、第Ⅱ期（721～745）、第Ⅲ期（745～757）、第Ⅳ期（757～770）、第Ⅴ期（770～784）
土器：平城宮土器Ⅰ（710）、Ⅱ（720）、Ⅲ（740）、Ⅳ（760）、Ⅴ（780）、Ⅵ（800）、Ⅶ（825）

11　本書の編集は、Ⅰ清水真一、Ⅱ小池伸彦、Ⅲ中島義晴が分担しておこなった。巻頭図版および中扉のデザインは中村一郎が担当した。また、英文目次は、ウォルター・エドワーズ天理大学教授の校閲を受けた。